



## 岩手県立中央病院移転新築 30 周年記念誌作成委員会 委員長 望月 泉

1987(昭和 62)年 3 月、県立中央病院は中津川河畔本町一丁目からここ上田一丁目に新築移転し、本年 2017(平成 29)年 3 月でちょうど 30 年目を迎えました。1995(平成 7)年 11 月、2005(平成 17)年 11 月にそれぞれ青氷第 1 号、第 2 号として「岩手県立中央病院 10 年のあゆみ」が発刊されていきましたので、本記念誌は青氷第 3 号として「30 年のあゆみ」となります。本記念誌のタイトルは次世代へのメッセージもこめて「30 年の軌跡、新たな歩みのために」としました。

私自身も移転翌年の 1988(昭和 63)年 4 月 1 日、小児外科長として当院に東北大学第 2 外科から赴任、1999(平成 11)年 11 月からは消化器外科長としてこの 30 年間岩手県立中央病院とともに歩んでまいりました。小児外科医、消化器外科医として数多くの手術症例を担当し、2006(平成 18)年副院長、2012(平成 24)年からは病院長として当院の舵取りをしてきました。

当院は県立病院のセンター病院として高度・先進医療に取り組むと同時に、断らない救急を病院のミッションとしてかけ、全診療科参加型の救急医療をおこなう(全科オンコール)体制を作り上げてきました。また医師不足が深刻な地域の公的病院へ医師を派遣するとともに臨床研修指定病院として医師の養成や県内医療従事者を対象とした研修・教育にも取り組んできました。

一方、累積損益は 1998(平成 10)年がピークとなる大きな欠損金をかかえていましたが、目標をさだめ全職員が同じ方向を向きトップダウンとボトムアップの手法で種々の業務改善に取り組み、黒字転換できました。今後の当院の 2 大テーマは、ひとつは地域包括連携の構築、病院完結型医療から地域完結型医療への転換です。高齢者の看取り、在宅医療を視野に入れたシームレスな地域包括ケアの構築です。また、すぐ近くにある岩手医科大学付属病院が矢巾地区に移転することが 2019(平成 31)年 9 月に予定されています。盛岡医療圏としての入院体制、通年使用できるヘリポートの整備などを含めた救急医療体制の整備が急がれます。30 年間の当院の軌跡をたどるとともに、新たな歩みを祈念して本書を刊行することにしました。ご寄稿をいただきました皆様と編集に携わった多くの方々に心からの謝辞を申し上げて発刊のご挨拶とします。





私の時代と次世代へのメッセージ